

【失敗する前にやっておくべきこと】

今後、農業界は大きな変化を迎えるだろう。多くの人はその変化の兆候を感じていると思う。その変化の際に失敗せず時代の流れに乗るためにはどうしたら良いのだろうか。

未来など誰も本当の意味での予測などできない。おおよその想像はつくにしても、細かなことまではわからない。ビジネスや技術の面では、大雑把な予想も大事だが、実際に変化の波に乗っていく時に大事なものは、その変化した内容を正確に把握することである。つまり何が根本的に変わり、その変化にどのように対応するかということである。

表面的な変化であれば、誰でも気づくが、細かな部分は同じように見えても実は変化していて、それに対応できないということがある。技術的側面においてはその細かなことに気づけるか気づけないかの違いが大きく、失敗に至る最大の原因といえる。

例えば、点滴灌水チューブという資材がある。チューブ内で減圧させ、一滴ずつ吐出した水が土壌に浸潤する。従来の散水型に比べると必要となる水が少ないので、大面積に灌水できるといって注目された。実際には点滴灌水の効果は奥が深い。土壌に少量の水がゆっくり浸潤していくため、土壌中の酸素を追い出し

にくく、さらに、液肥を利用すれば作物の栄養生理に応じた追肥の施用にも適する。海外では、灌水という目的よりも、水と肥料を同時に灌漑として与えられる資材として理解されている。

新しい技術を活かせる人は何が違うのか

点滴灌水チューブについて一度は説明を受けたことがあるだろうし、カタログなども手にしているかもしれない。だが、多くの方はカタログを熟読しないし、営業マンの説明など話半分くらいにしか聞かない。

従来の散水型から点滴灌水型に移行すると、栽培においてはかなり大きな違いが生じる。極めて大きな転換をしているはずなのに、全く栽培方法を変えない人もいれば、施肥体系から抜本的に変える人もいる。はっきり言えば、前者は使いこなせていない人で、後者は新しい技術を活かせる人である。

栽培技術面から見るとこの違いはすぐにわかる。まず、点滴灌水がきちんと使用されているかどうか。次に、灌水方法の違いにより作物の生理状態が変わったことに気づくかどうか。そして、点滴灌水に応じた施肥体系や水管理などができるかどうかなどの違いが出てくる。つまり、

岡本 信一 Shinichi Okamoto

1961年生まれ。日本大学文理学部心理学科卒業後、埼玉県、北海道の農家にて農業研修。派米農業研修生として2年間アメリカにて農業研修。種苗メーカー勤務後、1995年 農業コンサルタントとして独立。1998年(有)アグセス設立代表取締役。農業法人、農業関連メーカー、農産物流通企業、商社などの農業生産のコンサルタントを国内外で行っている。講習会、研修会、現地生産指導などは多数。無駄を省いたコスト削減を行ないつつ、効率の良い農業生産を目指している。

Blog : 「あなたも農業コンサルタントになれる」

<http://ameblo.jp/nougyoukonnsaru/>

PROFILE

「点滴灌水」という大きな変化は誰にでも理解できるのだが、栽培条件がどう変化するかを想定して対応できる人はかなり限られるのだ。

大きな変化が栽培技術に関わるものだと、変化を明らかにしやすい。作物の出来として現れるためである。作物の出来の違いに気づけば、原因の追求は比較的容易である。

しかしながら、点滴灌水について理解していないと、点滴灌水チューブという資材が悪いと安易に片付けてしまいがちになる。そうなる原因究明はそこで終わってしまう。原因もわからないまま、栽培の失敗

だけが記憶に残るといふ最悪の結果になってしまふ。失敗の原因がわからなければ、偶然にさまざまな条件が見合った時のみ成功できるといふことになる。栽培技術的には、非常に恐ろしい状態である。

当たり前だが、新しい資材を最初から使いこなせる人などいない。導入してから、さまざまな変化を観察して、修正や細かな対応を加えていくことによって、使いこなせるようになっていくのだと思う。

実は技術的に上手い人はいない人がこれできないのだ。多くの優れた人は、誰からでも情報を引き出し、うまくいく方法を取り入れようとすゝる。上手いかな理由をわからなのままにしたいからである。

点滴灌水チューブを例に出して書いてきたが、点滴チューブを使用するという大きな変化の中でも見失つてはいけないのは、それによる変化を知ること、その後の栽培にも気づきを与えるきっかけを与えてくれることである。点滴灌水の特性や特徴を理解することであり、活用していくためには細かな修正を加える必要があるという点である。

新しいことを始める前に 本質を理解しておくこと

実は経営についても同じことが言

えると考えている。経営上の大きな変化、特に新規事業の取り組みや新しいことを導入するような場合の変化というのは、なかなか見えてこないで判断を下すのが難しくなる。誰でも明確に判断できる基準は、財務諸表くらいしかない。つまり、結果として表れて初めてわかることになる。新規性があればなおさら、良い状態であるのか悪い状態であるのか、自ら判断するには経験が足りなすぎるためである。

先ほどの点滴灌水チューブの事例を当てはめると、初めて使用した際に、何か違うなと思いつつ栽培期間が終了してから、収量が低いことに気づくという状態である。しかし、使いこなせる人、栽培技術に長けている人であれば、途中で変化に気づき修正して収穫までに失敗を最小限に抑えることができるのだ。

経営というのと同じで、その小さな変化に対応できるのか、できないのかによって、経営者としての資質が問われる。私は経営のコンサルタントではないので、アドバイスはできないが、失敗しそうということだけは理解できる。というのも、経営の資質のない人が新しい事業に乗り出すということが失敗する可能性の高いことだと知っているからである。点滴灌水の特性を理解せずに、

点滴チューブを導入してしまふ人と同じで、新しいことや事業の本質を全く理解できないまま始めてしまふということになる。本人は理解していると思っているのが困ってしまう点で、周囲は明らかに失敗することがわかっていのに失敗に向かってしまふことになる。

成功するかどうかは明確にはわからないが、必ず失敗するやり方というのがある。点滴灌水の場合なら、基肥の量を減らして追肥で対応する、目詰まり対策をするといった当たり前のことを確実にやっておくだけで必ず失敗する状況は避けられる。ここでつまづく人は必ず失敗するのである。成功は天候条件次第になつてしまふ。経営でも同じで、大きな変化に対してポイントが理解できない人は成功する可能性が低くなり、たまたま成功することにかけるしなくなつてしまふ。

人には向き不向きがある。時代の变化に対応できる人もいるし、新しい事業の先頭に立つことに向いている人もいる。同時に経営に向いていない人もいる。優れた経営者であれば、自分の向いていない分野については人に任せているが、そうでない人はすべてを自分でやろうとしてしまふ。事業のポイントが見えない上に、自ら向いていない分野に向かう

ので、話を聞くまでもなく失敗する確率が高くなる。

農業界では特に栽培技術に特化した人も少なくない。経営や新しい事業に向いていない人は、向いている人に自分の苦手とするその部分を任せるべきだと思う。技術論や経営論は非常に大事なのだが、自らの適性に照らした立ち位置に収まるべきである。そうでないと、裸の王様になつてしまひ、立ち位置さえ間違えなければ尊敬される存在であり続けるのに、立ち位置を勘違いしているだけでトラブルになつてしまふだろう。

経営には自らの経営を守るだけでなく、取引先や提携する会社と継続的にきちんと仕事をこなすという意味もある。その際、多くの人が適材適所に配置されスムーズに事業が継続し、経営者自体に何があつても事業継続だけはきちんと行なわれる必要がある。

経営に向いていない経営者が陥るのは、自分がやらなくてはならないという思い込みが大部分で、そのことが事業の継続や事業そのものの存続を危うくしてしまふのだ。自分のことはなかなか理解できないものだが、多くの周りの方からの意見を素直に反対意見も含めて聞けば、大抵の場合うまくいくものである。